

## 書評

齋藤幸平

『大洪水の前に：マルクスと  
惑星の物質代謝』

(堀之内出版, 2019年)

山本 圭

本書は、MEGA 編集にも携わる著者が、長らく未刊行だった抜粋ノートを手掛かりに、マルクスに内在するエコロジーへの問題意識を再構成していくスリリングかつ手堅くもある思想史研究である。とはいえ、あらかじめ断っておけば、評者の専門は政治学であり、本書のマルクス解釈を専門的に評価する立場にない。そこで本稿では、著者の近年の関心のありかに着目し、その問題と思われるところについて考えてみることにしたい。

まず本書の企図は、「資本主義の疎外を人間と大地との本源的統一の解体として把握することではじめて、マルクスが共産主義のプロジェクトをこの統一の意識的な再生として整合的に捉えていたことを認識できるようになる」(48頁)というものである。したがって、重要なことは、人間と自然の調和的な統一を回復することになるだろう。マルクスの関心の中心にエコロジーがあったことを示す本書の議論は、マルクス研究として十分説得的であるし、これまでの一般的なマルクスのイメージをひるがえす点で、大きなインパクトを持っている。

さて、著者のこのような問題意識は、昨今の気候変動をはじめとした環境危機にあって、きわめてアクチュアルなものである。労働者たちのアソシエーションによって、物象化の力を緩和し資本主義を超越すること、著者はこれを『ユダヤ人問題によせて』でのマルクスを彷彿とさせつつ「人間的解放」(「革

命と民主主義」Nyx No. 5) とも呼んでいる。しかし、この人間的解放が自然との調和とセットで語られるとき、それがどこか不穏なものとして現れるのも確かである。藤原辰史が指摘するように、人間と生命の循環を説いたものが、ナチスの「帝国自然保護法」であったことを想起すれば、「人間と大地との本源的統一」を訴える本書のヴィジョンには、どこか一抹の危うさも感じられてしまう(藤原辰史『分解の哲学』青土社を参照)。

このことは、著者が別のところで批判する「政治主義の畏」という問題ともかかわっている。政治主義とは、著者によれば「日本版のサンダースやコービンを探し、素晴らしい政策を考えつく識者を見つけ、選挙に勝って新しい法律と制度を施行し、「上からの」制度改革を成し遂げる」、つまり「闘いの主戦場が選挙政治と政策立案になってしまっている」(『未来への大分岐』集英社新書 55頁)、そうした政治戦略を批判的に表現するものだ。つまり本来であれば、社会運動と政治のボトムアップ的な結び付きこそが不可欠であるのに、いまの日本の政治はそうになっていない、そう齋藤は問題を提起する。

社会運動との連携が希薄な政治戦略を「政治主義」と呼ぶことの可否はここでは措こう。さらに、社会運動の重要性にも全面的に賛同する。それでもなお問題に思われるのは、ここでまたしても「社会運動と政治との本源的な統一」のようなものが想定されていることだ。つまり、少し手垢の付いた用語でいえば、齋藤の図式では〈政治的なもの〉と〈社会的なもの〉の緊張関係は抹消され、前者は後者に飲み込まれ、矛盾のない調和のようなものが目指されている。これが明確に〈政治的なもの〉に対するバックラッシュであることは確認されてよい<sup>1)</sup>。

人間と大地との本源的統一にしても、社会運動と政治の一致にしても、著者の関心を貫くのは、資本主義を克服するために失われた全体性を回復し、循環をつくりだすことである。確かに、エコロジーや

1) 〈政治的なもの〉の否定は、このかんの齋藤の一貫した立場である。たとえば、「ポスト・マルクス主義が経済的なものの特権をはぎ取り、様々な闘争を同列にして、政治的なものの自律性を称揚することでみえなくなってしまったマルクスの根源的洞察である。」(「革命と民主主義」Nyx, No. 5, 273頁)

社会的生産レベルへの目配りは、間違いなく民主主義の深化にとって不可欠なものにちがいない。しかし、全体性や同一性の暴力からマルクスを救い出すという、かつてのマルクス主義者らの努力に想いを馳せるとき、あるいは経済主義というくびきから偶発性とヘゲモニーの概念を引きはがしたポスト・マルクス主義の立場からすれば、これまでの偏り（政治主義）を単に逆方向にひっくり返すような著者のプロジェクトには、いくぶん懐疑的に構えてしまうのだ。